

総括コメント

本シンポジウムの目的は、趣旨文に示されているように、①思想研究の現代における意義の検討、②思想の動態的側面に着目して、「日本思想史学の未来を展望」することにある。学会当日、評者は日本での研究動向を前提としつつも、韓国での学界動向を踏まえてコメントを行った^①。というのも、ながらく韓国で研究に携わっていた経験をもつ評者にコメントを求めるといふ企画意図は、日本以外での研究動向を含みこんで「日本思想史学の現在と未来」を展望することにあると判断したからである。

さて、評者が主としてコメントを任せられた松田宏一郎報告は、欧米の歴史研究、思想史研究の論争的動向をもとに、その理論的問題を検討したうえで、思想史研究が

担うべき領域・視座を論じたものである。松田報告が問うたのは、近世／近代を時間軸のなかで、それも仮構された〈西洋〉と不可分の〈近代〉を、研究者が「予示」（あるいは欲望）しつつ議論を立ててきたという、いうならば閉ざされた学術的営為自体の問題性である。くわえて、近年、日本での歴史学／思想史学において領域を越えて議論されている、(宮島博史氏らをはじめとする)「東アジア近世化」論をもとりあげ、「日本近世」特殊論^②への批判が開示された。つまり、「予示」としての西洋^③「近代と特殊」日本を両ながらにはらむ〈近世／近代〉といった歴史・思想史記述を、いかに開いていくかを模索したといえよう。以下、この二つの点についてコメン

金津 日出美

トすることにしたい。

行論の關係上、後者についてはからはじめると、東アジアを同時代的布置のなかで把握しようとする「東アジア近世化」論は、そもそも一国的枠組みを越えてようとする企てであつたにもかかわらず、(松田氏も指摘するように) ややもすれば「日本ニ特殊性論」の裏返しとなる危惧を抱かざるをえないという点は評者も首肯する。さすれば、それを開いていく回路はいかに見出せるだろうか。報告でも取り上げられた『「近世化」論と日本』の序論において、清水光明氏は「東アジア近世化」論を構成する四つの要素のうち、時代区分論における現時点での方途として、以下の二つを挙げてゐる。①比較史の指標を踏まえつつ、各国の「近世」の開始時期のずれの説明に議論の焦点を置くもの(宮島博史氏)と、②世界史上における「共通のリズム」や「共通の衝撃」に着目して、それらへの対応・解答を提示し、東アジアのみならず世界の「近世化」の様相を見ていこうとする発想(岸本美緒氏)の二つである。先の松田氏の議論はこの①を念頭に置かれたものであり、つまり、ある境界(ここでは東アジア)での「共通性」(その実現の失敗も含む)の概念化は、その境界内の各システムを比較する以上、「普遍性(共通性)／特殊性」といった枠組みを必然的にはらまざる

をえないことになる。その意味で松田氏の指摘は当を得たものであろう。

では②についてはどうであろうか。②の代表的論者とされる岸本美緒氏は下記のように述べる。

それでは、「近世化」論は、このような時代区分論の隘路を突破できるのであろうか。私見によれば、「近世化」論において、16世紀以降の諸地域にグローバルな「近世」を想定する理由は、これら諸地域の社会に「共通性」が見られるということではなく、また全世界的な「システム」が成立している、ということでもない。むしろ、この時期の諸地域が、16世紀の初期グローバル化の生み出した類似の課題と取り組みつつ、それぞれの社会を多様な形態で再編していったということに着目しようとするからである。……どれが先進的でどれが後進的かといった評価よりもむしろ、それぞれの地域の人々が渾身の力を以て提出した解答の多様性、その問題提起力に注目してみたい。「近世」論ではなく「近世化」論として「化」の字を付け加えることによつて、共通の問いに対し多様な答えが生み出されてくるダイナミズムへの問題関心を、多少なりとも表現できるのではなからうか——このような見通しが、

「近世化」論の背後に存在すると考えられる。⁴⁾ (傍点
—引用者)

ここでいわれる、システムの「共通性」ではない「共通の課題、共通の衝撃」への対応・応答——「比較」を前提とした「共通性」の析出ではない、その「共時性」への着目は、さきに述べた回路に関するひとつの方向性を示しているのではないだろうか。そしてまた、韓国における朝鮮時代史研究の新たな潮流もこうした点とかわっているといえる。韓国の人文学(ことに歴史学)では、ながらく植民史観の克服をめざした民族史観が主流を占め、朝鮮時代史にかかわっていえば、「自発的近代論」「内在的發展論」が大きな影響力を有していた。⁵⁾ 近年、一国的歴史記述が見直されるにあたって、それらをいかに克服するかが課題となり、海域アジア、海を媒介とする共時的空間のなかで朝鮮社会を把握する研究が注目を集めている(書物や知の流通など——表1)。そのほかにも、「壬辰・丁酉倭乱/文禄・慶長の役」を壬辰戦争として再定義し、東(東北・北東)アジア圏域における歴史的ダイナミズムのなかで把握しようとする試み⁶⁾なども注目されている。加えて思想史関係学会の動向をみると、二〇〇〇年代に入り、一国思想史的枠組みを越えた共時的な思想課題に軸を据えたテーマが散見されること

が注目に値する。こうした視座は、民族史観の見直しは無論のこと、一国的記述の批判的視座として提示されており、そして看過されてならないことはそれらが現代的課題と密接に関わっているという点である。したがって、「東アジア近世」論における「普遍/特殊」という枠組みの問題性の指摘にとどまらず、こうした共通の衝撃・課題への着目——共時性といった視座について議論を深めていく必要があるのではなからうか。

次に、仮構された西洋型近代にかかわってひと言申し述べたい。そもそも「西洋型の近代化の理念」そのものに対する疑念が指摘されて久しい。松田氏も述べるごとく、「単線的な時間軸の上にその近代化達成度を査定するのは知的に建設的でなく、「近世から近代へ」というターム自体も理念型としての西洋型近代を尺度として成り立っているという点は、指摘されてしかるべきである。ただし、評者はこの点についても、韓国での植民地近代をめぐる議論が参照に値すると考えている。その代表的論客である尹海東氏は下記のように述べる。

西欧と植民地は、同時に発現した近代性の多様な屈折をあらわしており、近代はもう特定の地政学的位置に結びつけて考えられるテーマではない。……「近代は、すべからず、植民地近代」である。これは、

植民地を社会進化論的な文明論の発展段階に準じて下位に位置づけることを拒否する、ということを意味する。このような認識は、植民地が一国的で自足的な政治・経済・社会的な単位ではなく、帝国の一部を成していたということ、そして帝国と植民地は相互作用するひとつの「絡み合う世界」を成していた、ということ为前提としている。……「植民地近代論」は、帝国と植民地をつらぬく共時性と、植民地とポスト植民地をつなぐ通時性を同時にもつのである。さらに、植民地もまた収奪と文明化・開発の両面を兼ね備えている。要するに、植民地近代という問題意識は、近代の両義性と植民地の両義性が交錯する地点に位置しているのである。(傍点―引用者)

植民地近代論とは、戦後韓国歴史学の主流であった民族主義に立脚する「植民地収奪論」と、その批判である「植民地近代化論」の双方に共有された近代至上主義を批判するなかで提出されてきたものである。「近代はすべからず植民地近代である」――つまり、帝国と植民地は相互に作用しながら、近代、さらに近代性を構成する不可欠の要素として把握される。たしかに明治以降の日本は政治制度的には植民地とはならず、帝国の道を歩んだものの、江戸後期より遭遇する西欧はまさに植民地

近代を構成する帝国であったのであり、当該期の日本に、そして日本の知識人にそれへの対峙が求められたとするならば、それは「植民地近代」への対峙であり、それへの応答・格闘として把握する必要があるのではないだろうか。無論、その後の日本は、帝国への道を歩んだ。しかしさればこそ、「近代の両義性と植民地の両義性が交錯する地点」として近代日本は分析されねばならないだろう。さきの尹氏の議論が、現在にいたるポスト植民地の時代にもらみつつ提起されていること、そして「現代における意義」を趣旨に掲げた本シンポジウムであればこそ、この問題は議論されてしかるべきではないかと考へる。

表1 韓国の歴史学系学会における東アジア関係大会テーマ・報告タイトル
歴史学会

二〇一八年「東アジア前近代の知識人のネットワークと改革思想」

宋代文人集団の知識ネットワークと改革思想

クビライ即位初の王文統の改革政治

徳川日本の昌平饗を中心とする知識ネットワーク

麗末鮮初の知識ネットワークと改革思想

17世紀朝鮮儒学者の知識ネットワークと改革思想

二〇一六年「海洋と歴史――境界を越える想像力」

近代の大西洋世界形成――海洋貿易とブランドেশション

一四八〇年のイェルサレム巡礼旅行――近代アジア海洋と跨国的承

認ディアスポラの形成

東アジア海域経済史と日本の近代

海からみる韓国史

近代西洋人がみた韓国の領土と海洋

全国歴史学会…統一テーマ

二〇一一年 全国歴史学会大会 国境を越えて——移住と離散の歴史

近代東アジアからの移住と離散

なぜホモ・ミグランスなのか?——最近の移住史研究動向とその意味

韓人の満州移住様相と東アジア——移住から殖民へ/資力から動員へ

20世紀前半の韓人の日本移住と定着

ジェンダーの視角からみる中央アジア高麗人移住

分断と戦争の遺産、南北離散(分断ディアスポラ)の歴史

海外華人資本の形成と跨国ネットワーク

多文化民族主義 (multicultural nationalism) は可能か?——イギリス

スの移住者問題と多文化主義を中心に

全国歴史学会参加学会…歴史学会、経済史学会、大邱史学会、都市史学会、

東洋史学会、釜山慶尚史学会、歴史教育研究会、韓国考古学会、韓国科学史学会、

韓国美術史学会、韓国民族運動史学会、韓国思想史学会、韓国史研究会、韓国

史学会、韓国史学会、韓国西洋史学会、韓国女性史学会、韓国歴史民俗学

会、韓国歴史研究会、湖南史学会

表2 韓国思想史学会 東アジア関係大会テーマ

全国歴史学会大会 パネル (二〇一〇・五) 境界の時代、境界の知識人

全国歴史学会大会 パネル (二〇一一年・二) 海外体験と韓国思想

学術大会 (韓国史学会共催 二〇一四・六) 18〜19世紀東アジア

の思想と歴史学…境界を越えて

表3 韓国日本思想史学会 東アジア関係大会テーマ

二〇〇五・一〇 朝鮮実学と日本実学——交流と比較

二〇〇八・一一 戦争の記憶と治癒としての平和思想、そして21世紀

東アジア共同体

二〇〇九・五 日韓思想と文化、そして21世紀コンテンツ

二〇〇九・一〇 東北アジアの平和の模索と他者認識——歴史葛藤の国家主義を越えて

二〇一〇・一一 韓国併合一〇〇年——東アジアトランスナショナルリズムの様相

二〇一一年・一一 デイアスポラと「超」国家主義——その批判的検討

二〇一三・六 8・15は東アジア人にとって何なのか

二〇一三・一一 日韓両国の集団記憶に対する思想的考察

二〇一四・六 日韓共同の歴史認識のための思想的条件——公共性と寛容

二〇一四・一一 東アジアの共生、共存は可能か

二〇一五・一一 東アジア近代史のなかの「交流」思想の脈絡

二〇一六・五 戦後日本の民主主義と東アジア

二〇一六・一一 戦後日本民主主義と東アジア思想史の変容

二〇一八・五 明治維新一五〇周年特別学術大会…明治維新の思想課題と東アジア

(出典…表1〜3ともに韓国学術誌引用索引(CI)機関検索(<http://www.kci.go.kr/>)、各学会 web サイトより作成)

注

(1) 本稿は当日の配布資料と会場で提示したパワーポイント資料に若干の加筆・修正を施したが全体の趣旨に大幅な変更はない。

(2) (1)比較史(小農社会と朱子学理念、朱子学化プロジェクト)と印刷出版文化の隆盛、東アジアの新軍事政権等)、(2)時代区分論(「共通のリズム」「初期近代」「儒教的近代」等)、(3)秩序の文法(中心と終焉、「風俗」・君臣関係と「議論政治」、外交規範の多義性、「儒教政治文化」等)、(4)現代的問題意識(「平和」への認識、「東アジアの猜疑」、歴史教育・歴史教材の様々な試み等)。清水光明「『近世化』論の地平——既存の議論群の整理と新事例の検討を中心に」(清水光明編『近世化』論と日本——「東アジア」の捉え方をめぐって』勉誠出版、二〇一五年)八頁。

(3) 同前、一〇頁。

(4) 岸本美緒「『近世化』論における中国の位置づけ」(同前所収)五九〜六〇頁。

(5) いわゆる「植民史観」とは他律性論、停滞性論、日鮮同祖論、党派性論などをその内実としている。朝鮮時代史の主流となる「自発的近代論」「内在的發展論」とは、植民史観の克服をめざしたもので、「他律的」「停滞」した朝鮮社会ではなく、「自発的」近代へ

の要素が朝鮮社会に「内在」していたことを、一國史的に実証しようとする潮流を指す。

(6) 정두희・이정순 엮음 『임진왜란·동아시아 삼국전쟁』 휴머니스트、二〇〇七年(鄭杜熙・李璟珣編『壬辰戰爭——一六世紀日・朝・中の國際戰爭』金文子監訳・小幡倫裕訳、明石書店、二〇〇八年)など。ちなみに「壬辰戰爭」という呼称をめぐることは、東アジア共同体論とかかわりながら、二〇一一年を前後して『東アジア史』教科書への用語採用をめぐる社会的な議論ともなり、学界の枠を越えた広がりを見せていることを付記しておく。

(7) 尹海東『植民地がつくった近代——植民地朝鮮と帝国日本のもつれを考える』(沈熙燦・原祐介訳、三才社、二〇一七年)二九四〜二九五頁。なお、本書については、岡崎享子氏と桂島宣弘氏による二本の書評もあわせて参照されたい(『東アジアの思想と文化』第九号、二〇一八年、『新しい歴史学のために』第二九二号、二〇一八年)。

(立命館大学准教授)